The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北京大学蔵西漢竹書について
Author(s)	中国出土文献研究会
Citation	中国研究集刊. 2011, 52, p. 105-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『中国出土文献研究２０１０』（『中国研究集刊』別冊特集号（総五十二号）　平成二十三年二月　一〇五―一一八頁

北京大学蔵西漢竹書について

中国出土文献研究会

一、戦国楚簡研究会から中国出土文献研究会へ

一九九八年五月、郭店楚簡の全容が『郭店楚墓竹簡』（荊門市博物館編、文物出版社）として刊行された。これを受けて、同年秋、我々は浅野裕一を代表者とする「郭店楚簡研究会」を組織した。島根、大阪、東京などで研究会合を開き、各文献の釈読を進めた。

ところが、二〇〇一年十一月、上博楚簡の内容が『上海博物館蔵戦国楚竹書』（上海古籍出版社）として公開され始めた。郭店楚簡と上博楚簡は、ともに戦国時代の「楚簡」であり、また、両者に共通する文献も含まれていたことから、この両者を視野に入れた研究の必要性が痛感された。そこで我々は、この二つの楚簡を対象とする総合的な研究を推進することとし、会の名称も「戦国楚簡研究会」と改め、活動を継続することになった。

それから約十年、戦国楚簡研究会は、国内外において精力的な研究活動を展開し、メンバーが刊行した出土文献関係の著書は十冊を数え、関係論文は優に百本を超えた。『上海博物館蔵戦国楚竹書』は、二〇一〇年十月現在、第七分冊までが刊行されており、残る第八・第九分冊および別冊などについても更なる研究が期待される。

しかし、出土文献研究をとりまく環境はこの数年、さらに大きく変化した。それは、郭店楚簡や上博楚簡に匹敵する新たな竹簡の発見である。たとえば、二〇〇七年に湖南大学岳麓書院が入手した「岳麓書院秦簡」、二〇〇八年に清華大学が入手した「清華大学竹簡」。また、二〇〇九年に北京大学が入手した「北京大学蔵西漢竹書」。さらには、一九七二年に発見された銀雀山漢墓竹簡も、『銀雀山漢墓竹簡［壹］』が刊行されてからしばらく刊行が滞っていたが、二〇一〇年に入って、ようやくその［貳］

が刊行された。これら新出土文献の相次ぐ公開によって、中国古代思想史研究は、さらに大きな飛躍期に入ったのである。

そこで我々研究会も、「戦国楚簡」に限定することなく、これらの出土文献を総合的に検討する必要に迫られた。従って、研究会の名称も「戦国楚簡研究会」から「中国出土文献研究会」に改称し、より広い視野で新出土文献を研究することとしたのである。

二、北京大学訪問

その研究会のはじめての仕事となったのが、北京大学の訪問である。二〇〇九年に北京大学が前漢時代の大量の竹簡を入手したとの情報を得た我々は、清華大学出身の研究者刁小龍氏（人民大学）の仲介により、二〇一〇年七月中旬、北京大学に面会を申し入れ、快諾を得た。

渡航に先立ち、研究会メンバーの内、関西在住の湯浅邦弘、福田一也、草野友子、金城未来の四名は、大阪大学で北京大学竹簡の勉強会を行い、基礎的な情報の整理を行った(注1)。そして、その情報を携えて、二〇一〇年八月末日、浅野裕一、福田哲之、竹田健二とともに北京に向かったのである。日本は連日三十六度を超える記録的な猛暑が続いていたが、北京はすでに秋の気配。空港に降り立った我々は、二十五度の涼風に癒された。

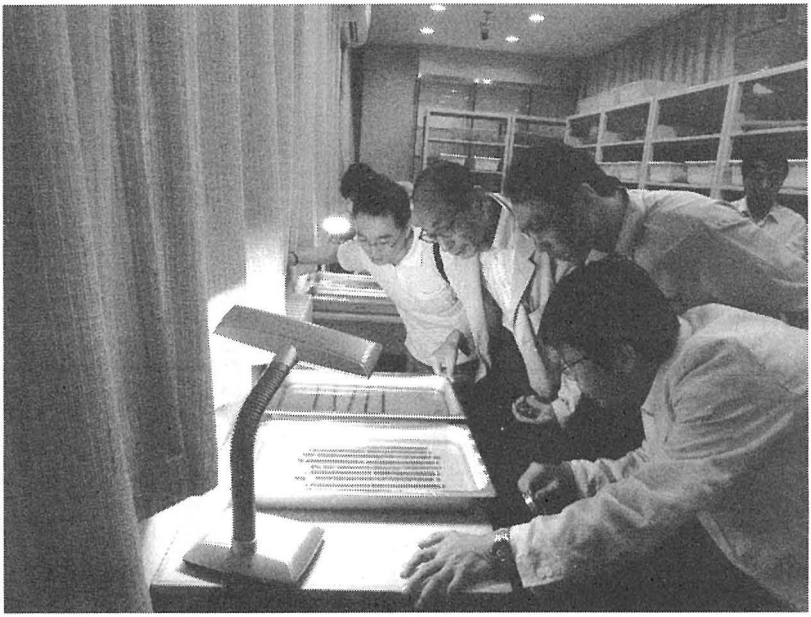
九月一日、我々七名の研究会メンバーは、刁小龍氏の案内で、北京大学東門から構内に入った。校舎には赤い「歓迎」の横断幕が掲げられており、我々の歓迎にしては大げさではないかなどと話していると、これは、当日が北京大学の新学期開始日で、新入生を歓迎する横断幕であるとのことであり、合点がいった。

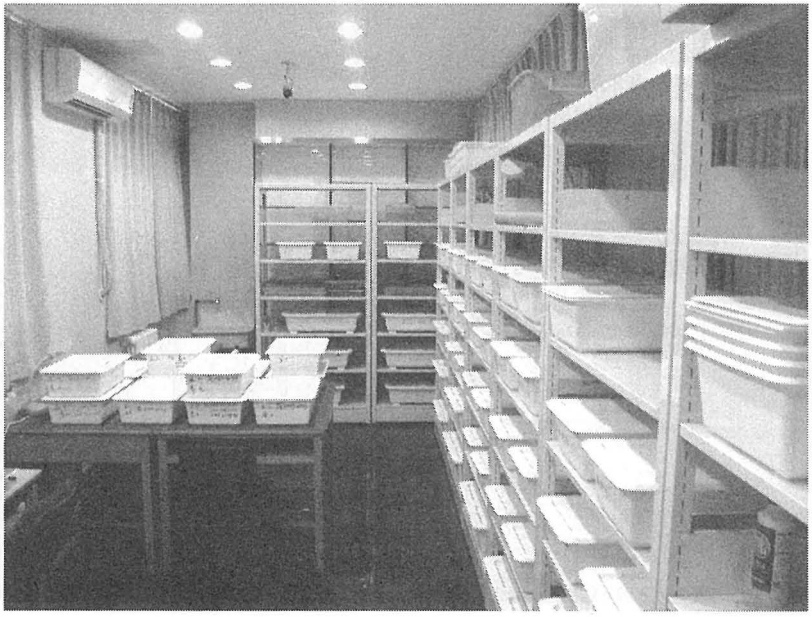
東門から直進して図書館を過ぎ、「歴史系」の建物に案内された我々は、北京大学出土文献研究所所長朱鳳瀚教授の出迎えを受けた。スクリーンが用意された一室に招き入れられた我々は、さっそく朱鳳瀚教授から北京大学竹簡の説明を受けた。この会合には、北京大学中国古代史研究中心の韓巍講師も同席した。パワーポイントのスライドは計三十三枚に及び、約一時間にわたって朱教授の説明を受けた。

その後、構内を移動し、「北京大学賽克勒考古与芸術博物館」に案内された。空調がきいてやや肌寒い一室に入ると、部屋いっぱいに竹簡の入ったトレーが配架されていた。窓側の机に四つのトレーがふたを外して並べられており、水に浸した竹簡が見えた。蛍光灯に照らされて、竹簡の文字は鮮明に見えた。持参した拡大鏡も使い、竹

簡の形状、文字などをメンバー全員で確認した。その詳細については後述する。

竹簡の実見は約三十分ほど。その後、この博物館の展示物を概観した後、朱教授らとともに昼食をとりながら、会談に入った。以下では、朱教授のスライドによる説明、竹簡の実見、昼食時の会談の内容などを踏まえて、北京大学竹簡の概要について説明したい。





三、北京大学竹簡の概要

北京大学竹簡は、盗掘の結果、流出した竹簡を、二〇〇九年一月十一日に北京大学が入手したもので、関係者からの寄贈とされるが、その経緯は未詳である。

一月十一日に北京大学に搬入された竹簡は、さっそくその翌日から整理作業が始められ、三月には、全竹簡の写真撮影が行われた。その過程で、竹簡群の中に算籌と漆器の残片が混じっていることが判明した。また、竹簡上に繊維の残留痕が見られるものがあり、しかも、編綫の痕跡が文字にかぶっている竹簡が多く見受けられたことから、これらの竹簡は、編綴した後に文字を記したものではなく、文字を記した後に綴じたものと推測される。編綫も一部残っていたが、それは、我々が想像していたものより太く、三つ編みのようになっていた。

竹簡の総数は三三四六枚、完整簡は二三〇〇枚以上（うち完簡は一六〇〇余枚）。郭店楚簡が七三〇枚（有字簡）、上博楚簡が一二〇〇余枚であるから、それらをはるかに上回る相当の分量であることが分かる。

数術類の竹簡に「孝景元年」（前一五六年）と記した紀年簡があることから、竹簡の年代は前漢中期、その多くは武帝時代（前一五七（在位、前一四一）～前八七）に

書写されたものと考えられる。ちなみに、馬王堆三号漢墓は、前一六八年頃の造営で、馬王堆帛書『老子』甲本は前一九五年以前に筆写されたものであると考えられている。

竹簡の形状は、長・中・短の三種に分類でき、簡端はいずれも平斉。簡長は、長簡が約四十六cmで、漢代の二尺に相当し、三道編綫。内容は、主に数術類。中簡は三十～三十二cmで、漢代の一尺三寸～四寸に相当し、三道編綫。内容は、主に古代典籍。短簡は約二十三cmで、漢代の一尺に相当し、両道編綫。内容は、医書類である。

出土地については、未詳であるが、朱教授の説明では、江蘇、安徽辺り（南方地帯、漢代の楚）ではないかとのことであった。

炭素14の年代測定は行われていないようであるが、これは、竹簡の状況や謹直な漢隷の字体、そして何より紀年簡が出土したことにより、とりあえずその必要性がないと判断されているからではなかろうか。

内容は、すべて古代の書籍で、『漢書』芸文志の分類する「六芸類」「諸子類」「詩賦類」「兵書類」「数術類」「方技類」に及ぶ。こうした広範な領域にわたる文献が含まれていたのは、きわめて貴重であり、中国思想史はもとより、中国史、文学史、文字学など多方面の研究に大きな影響を与えることが予想される。

以下では、朱教授の説明の順序に沿って、各々の内容を、我々の実見の結果や筆者（湯浅邦弘）の考察も踏まえて紹介したい。

（1）六芸類

六芸類に分類されたのは、『蒼頡篇』と『趙正（政）書』である。『蒼頡篇』については、小学書研究の立場から、研究会メンバーの福田哲之が後述する。

『趙正（政）書』は古佚書で、今回はじめて明らかになった始皇帝時代の歴史文献である。竹簡は五十余枚、総字数は約一五〇〇字。書名は、竹簡に記されていた。内容は、始皇帝（趙政・嬴政）の死と秦朝滅亡にまつわる内容で、始皇帝・胡亥・李斯・子嬰などの言動が記述され、始皇帝臨終の際の遺命や李斯の獄中の上書も含まれているという。

文中では、始皇帝と胡亥は、「秦王趙正（政）」「秦王胡亥」と称されており、「始皇帝」「二世皇帝」とは記されていないため、作者が秦朝の正統性を認めない立場にあったと推測される。『史記』蒙恬列伝・李斯列伝に見える部分もあり、司馬遷が『史記』を書いた際の参考文献の一つではないかと考えられ、資料的価値が高い。

（2）諸子類

諸子類でまず特筆されるのは『老子』である。竹簡二一八枚、約五三〇〇字（重文を含む）。「老子上経」「老子下経」の篇題が竹簡背面に明記されており、それぞれ「徳経」「道経」に対応する。各章冒頭には、章を分ける符号があり、各章の末尾は留白となっている。欠損している竹簡は、全体の一パーセント、竹簡にして二本分、約五十～六十字くらい。ほぼ完璧な『老子』古本である。これは、馬王堆帛書・郭店楚簡に次ぐ第三の『老子』古本であり、これまでで最も保存状態の良い漢代の『老子』テキストであると評しうる。また、各章の内容や分章は現行本と異なる点もあり、『老子』の整理・校勘にきわめて有力な資料である。

なお、現在、この竹簡『老子』の釈読を担当している韓巍講師によると、馬王堆漢墓帛書『老子』とこの竹簡本とを対照した結果、「徳経（上経）」「道経（下経）」という順序、および各章の配列は基本的には同様であり、「道経」末尾の一箇所のみ順序の異なる点があるとのことである。いずれにしても、今後『老子』研究を進めようとする場合には、最重要のテキストとなることは間違いない。

次に、古佚書『周馴（訓）』。竹簡二〇〇余枚、約四八〇〇字。竹簡に篇題が明記されている。『漢書』芸文志の道家類に「『周訓』十四篇」と記録されており、それに比定できる可能性がある。

内容は、「周昭文公」（戦国中期の東周の君、昭文君ともいう）が「恭太子」（西周の君、武公の太子）に訓戒するというもので、上は堯・舜・禹から下は戦国中期に至るまでの歴史事項が記されている。これまで見られなかった商湯から太甲への訓戒、周文王から周武王への訓戒などを含む。また、君たるの道を述べる長編の文章もある。戦国晩期に編纂され、貴族子弟に対して政治教育を行うために用いた教材であると考えられる。さらに、周文王に四人の子がいたとする点が、従来の文献の記載と異なっており、重要な意義を有する。

この種の文献としては、二〇〇九年、『文物』誌上で先行公開された清華大学竹簡の「保訓」がある(注2)。「保訓」は、周文王が武王へ訓戒する内容を記したものであるが、竹簡はわずかに十一本。これに対して『周馴（訓）』は、より豊富な訓戒集と言える。

朱教授の説明では、こうした歴史故事集とも言える文献は、とても「道家」とは思えず、『漢書』芸文志に記録される「『周訓』十四篇」に当たるのかどうかについては

疑問が残るとのことであった。

ただ、『漢書』における「道家」の定義は、「道家者流は、蓋し史官より出ず。成敗存亡禍福古今の道を歴記し、然る後に要を秉り本を執り、清虚以て自ら守り、卑弱以て自ら持するを知る。此れ君人南面の術なり」というものであり、我々が現在意識するいわゆる「老荘」風の思想ではない。とすれば、こうした文献が、当時の人々にとって「道家」に属すると考えられていた可能性は充分にあると言えよう。

さらに、古佚書『妄稽』も注目される。竹簡一〇〇余枚、約三〇〇〇字の文献である。竹簡に篇題が明記されている。士人家庭内部における主人「周春」・妻・妾の葛藤が描かれており、現時点で最古・最長の小説と言える。天水放馬灘秦簡にも小説『志怪故事』が含まれているが、短編であり、内容も「志怪」である。これに対して「妄稽」は、家庭内の日常が描かれているという点で、より近代的な意味での小説に近い。

篇題の「妄稽」とは、妻の名で、「爲人甚醜以悪」つまり容貌も心根も醜悪であるとされている。対して妾の名は「虞士」であり、こちらは美人で性格も良いとされているという。すなわち、明確なキャラクター設定がなされた小説なのである。従来、中国の小説は、唐代の志怪小説あたりを中心に説明されてきたが、前漢武帝期以前にすでにこうした文学性を有する小説が存在していたことは大いに注目される。換言すれば、こうした近代小説の先駆とも言えるような小説が古くからあったにもかかわらず、なぜその後、継承され、発展していかなかったのかとの疑問が生ずるとも言えよう。

（3）詩賦類

詩賦類としては、『魂魄賦』がある。竹簡五十余枚、約一二〇〇字。篇題は見つかっておらず、「魂魄賦」とは整理者による仮称である。人格化された「魂」と「魄子」との対話形式であるが、『楚辞』のような文ではなく、四字句を連ねた明らかな漢賦であるという。内容は、魂が魄を旅に誘うが、魄は病弱を理由に断る。だが、最後は魂の説得に応じて一緒に旅立つというもので、文学性が高いとされる。これまでに出土した簡帛文献の中では最古・最長の賦である。

（4）兵書類

篇題未詳の兵書が一つ含まれている。竹簡十余枚。『漢書』芸文志は、兵書を「兵権謀」「兵陰陽」など四つに分類しているが、この文献は、その内の「兵陰陽」家に分

類できる兵書であるとされる。その理由は、銀雀山漢簡『地典』に類似しているからであるという。

少し横道にそれるが、ここで、『地典』について概説しておこう。銀雀山漢墓竹簡は、冒頭にも紹介したとおり、一九七二年に発見され、その内の『孫子兵法』『孫臏兵法』『尉繚子』『晏子』『六韜』『守法守令等十三篇』が一九八五年、『銀雀山漢墓竹簡［壹］』（銀雀山漢墓竹簡整理小組、文物出版社）として公開された。その際、これ以外にも、第二輯に「佚書叢残」が、また第三輯に「散簡」「篇題木牘」「元光元年暦譜」が収録されると予告されていたが、その後、長らく続輯は刊行されなかった。

二〇一〇年一月、『銀雀山漢墓竹簡［貳］』（銀雀山漢墓竹簡整理小組、文物出版社）が刊行された。第一輯で予告されていたとは言え、第二輯はほとんど何の前触れもなく、突然公開された。それは、銀雀山漢墓竹簡の発見から三十七年後、『銀雀山漢墓竹簡［壹］』の刊行から二十四年後のことであった。その内容は、第一輯で予告されていた「佚書叢残」に該当するもので、全体は、「論政論兵之類」「陰陽時令・占候之類」「其他」の三部に類別されている。

この内、「論政論兵之類」は五十篇からなる文献で、その十三番目の篇として『地典』が収録されている。「地典」とは、黄帝に仕えた「七輔」の一人で、この篇では、黄帝と地典とが用兵について問答を行っている。竹簡には断裂が多く、全体を精確に読み取るのは難しいが、たとえば、黄帝が「吾れ将に師を興し兵を用いんとするも、其の紀綱を乱す。請う其の方を問わん」と問いかけるのに対して、地典は、「天に寒暑有り、地に鋭方有り……天に十二時有り、地に六高六下有り。上帝以て戦い勝つ。……十二者相勝つに時有り」などと答える。

こうした内容をとらえて整理者は、銀雀山漢墓竹簡『地典』を「兵陰陽」家の兵法と考え、また、それに類似する内容の北京大学竹簡文献を「兵陰陽」家の兵書と考えたわけである。但し、銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」全体や『地典』の思想的内容については、まだ充分な検討が行われておらず、現時点で、北京大学竹簡に含まれるこの文献をそうした性格の古代兵書と位置づけて良いかどうかにはやや疑問が持たれる。

（5）数術類

北京大学竹簡の約三分の一の量を占めるのが、数術類の文献である。篇題が確認されている主な文献として、まず『日書』『日忌』『日約』がある。これらは、竹簡約一三〇〇枚。綴合後の完整簡は約七〇〇枚。特に、『日忌』

と『日約』は初めて発見されたものである。『日書』は、大多数がこれまでに出土した秦漢の『日書』にも見られる内容であるが、これまで見られなかった図や文字も含まれている。篇題は朱書されており、また複数簡にまたがる「占産子図」も鮮やかな朱色の人体図である。

そのほか、数術類に分類される文献の内、篇題が確認されているのは、以下のような文献である。

『堪（堪）輿』……内容は『日書』に類似し、後世の「看風水」の堪輿家とは異なる。

『六博』……博局を用いて占トを行う書で、尹湾漢簡『博局占』に類似する。

『雨書』……風雨気象占候の書。

『荊決』……卜筮の一種であり、算籌（計数に用いる小片）を使って占いを行う書。

『節』……四時節令について述べる『月令』に類似した文献。

（6）方技類

最後に医学関係の文献がある。竹簡七〇〇余枚。そのうち完整簡は約五三〇枚。各種疾病を治療するために記された古代の医方書であり、方技類の「経方」類に属す。章ごとに分章の記号と数字の編号があり、「一八七」までが確認されている。本文の前には単独の「目録」一巻があり、編号と医方名が記載されている。その内容は、内科・外科・婦人科・小児科など多くの種類の疾病の治療方法。病名・症状・薬の種類・数量・漢方薬の調製方法、薬の服用方法と禁忌に関することも含まれている。

注目すべきは、「秦氏方」「冷游方」「翁壹方」という篇名が見られる点である。これらは古代名医の名であり、その中の「秦氏」とは戦国時代の名医「扁鵲」ではないかと考えられている。

これら医書類は、馬王堆帛書『五十二病方』と密接な関係があり、馬王堆帛書に次いで、最も豊富な中国医学の資料であると評価できる。

四、北京大学竹簡の意義

我々が実見できたのは、四つのトレーに入った竹簡計三十七本であった。向かって右から、仮に第一トレー～第四トレーとし、その内容を紹介してみよう。

第一トレー

蒼頡篇　四本

趙正書　四本（篇題一を含む）

周訓　四本（最終簡文末に「大凡六千」の記載あり）

第二トレー

老子　二本（内一本は「老子上経」と記した篇題簡）

妄稽　四本

魂魄賦　三本

紀年簡　一本（「孝景元年」の記載あり）

第三トレー

医簡　五本

第四トレー

堪輿　二本

荊決　二本

六博　三本

節　一本

雨書　二本

これらの竹簡は、現在も整理・釈読作業が続いており、二〇一一年～一四年にかけて、上海古籍出版社から、十分冊程度で順次刊行の予定であるという。

なお、北京大学竹簡には、これとは別に秦簡もあるとのことで、これと区別するため、あえて「西漢竹書」と命名しているとのことであった。ただ「北京大学蔵西漢竹書」という名称はやや冗長なので、これからは「北大漢簡」という略称を使いたいとのことである。

また、これらが盗掘の結果、流出した竹簡なのであれば、複数墓からの出土物とは考えられないかとの質問に対しては、書風の均一性から見て、同一墓からの出土物と推測され、かつ、同一時期（おおよそ前漢武帝期）に筆写された可能性が高いとの回答であった。

では、この北大漢簡は、研究史上においてどのような意義を有すると言えるであろうか。それは、何より中国学研究全体に大きな影響を与えるという点であろう。二〇〇九年に一部の公開が始まった清華簡は、主に思想と歴史に関する出土文献を含んでいた。郭店楚簡や上博楚簡、銀雀山漢墓竹簡なども、中国思想史研究に与えた影響が最も大きかったと言える。

これに対して、北大漢簡は、思想や歴史の書に加えて、医学や数術、文学の領域に関わる多くの出土文献を含む。特に、『妄稽』や『魂魄賦』は、明らかに中国文学に関わる出土文献である。これまで、中国学の内、思想と歴史の領域については、我々の研究グループなど日本の研究者も充分に対応してきたと言えるであろう。だが、中国

文学の領域はどうであろうか。

確かに、中国文学、特に古代文学史を塗り替えるような発見はこれまではなかったのである。しかし、北大漢簡には、明らかに文学作品が含まれている。中国文学の研究者に鮮烈な挑戦状が突きつけられたと言えよう。

思想・歴史・文学。広範な領域での中国学研究が、これらの出土文献によって進展していくと期待される。

注

(1) 主な情報源としたのは、『光明日報』二〇〇九年十一月六日付け記事、および『北京大学出土文献研究所工作簡報』(二〇〇九年十月)である。

(2) 清華大学竹簡については、拙稿「清華大学竹簡と先秦思想史研究」(『中国研究集刊』第五十号、二〇一〇年)参照。

(湯浅邦弘)

五、『蒼頡篇』について

最後に『趙正(政)書』とともに六芸類に分類された『蒼頡篇』について報告する。

『蒼頡篇』は始皇帝の文字統一の一環として作成された識字書であり、漢代に入ってからも行われ、漢代小学書の成立に多大な影響を与えた。『漢書』芸文志(六芸略、小学)によれば、秦代に丞相李斯が「蒼頡七章」を作り、車府令趙高が「爰歴六章」を作り、太史令胡毋敬が「博学七章」を作ったが、漢代に入って「閭里書師」が「蒼頡」「爰歴」「博学」の三篇を合わせ、六十字ごとに章分けして全体を五十五章とし、『蒼頡篇』と総称したことが知られる。『蒼頡篇』はその後亡佚し、長らく実態が不明であったが、二十世紀初頭に発見された漢代の簡牘資料から『蒼頡篇』残簡が検出され、その後百年余りにわたって研究が進められてきた。北大漢簡『蒼頡篇』の意義を明らかにするために、以下、漢簡『蒼頡篇』研究史を三期に分けて略述してみよう。

まず第一期は、二十世紀初頭以降の敦煌漢簡『蒼頡篇』および居延漢簡『蒼頡篇』の出土である。漢簡『蒼頡篇』の発見は、漢代の第一次資料という点で研究者を驚倒させ、従来の単字を中心とした輯佚研究の限界を打開し、句式・押韻などの本文の実態に関する多くの新知見を提供した。しかし、敦煌・居延などの辺境のフィールドから出土した漢簡は基本的にほぼすべてが廃棄木簡であり、そこに含まれた『蒼頡篇』残簡の大部分は現地の役人たちが手習いした習書木簡であった。そのため、残簡自体

の数が限られている上に、残存字数の少ない断簡が大半を占め、しかもその多くが冒頭の第一章に集中するという、きわめて限定された範囲での検討を余儀なくされたのである。

こうした状況に対して第二期をもたらしたのが、一九七七年の阜陽漢簡『蒼頡篇』の出土である。阜陽漢簡『蒼頡篇』は、阜陽双古堆一号漢墓に副葬された竹簡の書物（冊書）のひとつで、それ以前のフィールド出土の『蒼頡篇』とは性格を異にする。被葬者（汝陰侯夏侯竈）の卒年との関連から、文帝十六年（前一六四）以前の書写とされ、避諱や語法の分析によって、漢代合編以前の秦本に依拠したテキストと見なされている。埋葬時点では「蒼頡」「爰歴」「博学」の三篇を包摂した可能性が高く、多様な分野にわたる収録字や押韻などの具体的な状況が明らかにされたが、資料数の点でなお大きな制約が存在した。阜陽漢簡は、墳墓の崩壊や盗掘などにより竹簡の缺損が甚大であり、『蒼頡篇』の場合も完簡は一点もなく、一二五点の残簡のうち八十点は残存字数三字以下の断簡で、残簡の綴合もわずか二例にとどまり、『漢書』芸文志から計数される総字数三三〇〇字に対して、六分の一足らずの五四〇余字が知られるに過ぎなかった。したがって、その検討には多くの制約が存在し、収録字や句式に関して断片的な情報は得られても、章や篇の排列や構成といった、より広い視野からの検討は、ほとんど不可能な状況だったのである。

北大漢簡『蒼頡篇』は、阜陽漢簡『蒼頡篇』のこうした限界を打開し、第三期をもたらす新資料として、きわめて重要な意義をもっている。以下、朱鳳瀚教授の説明と「北京大学出土文献研究所工作簡報（総第一期）」（二〇〇九年十月）とにもとづき、北大漢簡『蒼頡篇』の意義を三点にまとめておこう。

まず第一は何と言っても、竹簡七十余枚、残存字数およそ一二三〇字という資料数の多さである。この字数は、漢代改編本の総字数三三〇〇字の三分の一以上にあたり、全容の解明に向けて研究が大きく進展することは疑いない。朱教授のお話では、残存字数から推測して、竹簡七十余枚中に「蒼頡」「爰歴」「博学」の三篇が含まれている可能性が高いとのことであった。

第二は、竹簡の大部分が完簡であり、阜陽漢簡『蒼頡篇』では困難であった章の排列や篇の構成などに関する検討が可能となる点が挙げられる。朱教授によれば、北大漢簡『蒼頡篇』は漢代「閭里書師」による六十字一章の改編本と章立てが異なり、秦代の原本の様相に接近するものと見なされ、分章方法、毎章の標題の標示法、各

章の字数の多少など、これまで全く知られていない方式がとられているとのことであった。

第三は、これまで知られていた敦煌漢簡『蒼頡篇』・居延漢簡『蒼頡篇』さらに阜陽漢簡『蒼頡篇』との総合的な検討によって、新たな研究の進展が期待される点である。もちろんその具体的な状況は未知数であるが、北大漢簡『蒼頡篇』の編聯復原にこれらの先行資料が重要な役割を果たすであろうことは想像に難くない。また秦代二十章本と漢代五十五章本との関係についても、阜陽漢簡『蒼頡篇』と後者に該当することが明らかな敦煌・居延漢簡『蒼頡篇』との比較が不可欠とされよう。北大漢簡『蒼頡篇』との相互連結によって、これらの先行資料にさらなる新たな価値が生じ、『蒼頡篇』の実態解明に向けての一層の進展につながることが期待されるのである。

〔付記〕二〇〇八年八月に甘粛省永昌県水泉子M5漢墓から出土した木簡（水泉子漢簡）から、これまで知られていた四字句の『蒼頡篇』とは異なる七字句の『蒼頡篇』が検出された。その全容は未公表であるが、残存木簡は約一四〇余枚、すべて残簡で一〇〇〇余字が確認されるとのことである（張存良・呉荘「水泉子漢簡初識」〈『文物』二〇〇九年第十期〉、張存良「水泉子漢簡七言本《蒼頡篇》蠡測」〈『出土文献研究』第九輯、二〇一〇年一月〉参照）。この七言本『蒼頡篇』は漢代五十五章本をベースとするテキストと見なされており、北大漢簡『蒼頡篇』とともに秦代から漢代への『蒼頡篇』の変遷と漢代小学書への展開を辿るうえで極めて重要な意義を有している（拙稿「水泉子漢簡七言本『蒼頡篇』考―『説文解字』以前小学書における位置―」〈『東洋古典学研究 第二十九集』二〇一〇年五月〉参照）。

（福田哲之）